

【嵯峨野】 さがの

嵯峨野は京洛西の歌枕。愛宕山東麓より太秦の西部一帯の野。大堰川(保津川)を隔てて嵐山に対面する一帯の野です。現在の右京区西部に当たり清涼寺・天竜寺・大覚寺・広沢の池・小倉山などがあります。

「野は嵯峨野さらなり」と『枕草子』にあるように、古くから遊獵の地、隠棲の地として平安貴族に親しまれ、離宮や貴族たちの別荘が建てられました。嵯峨野を一言でいうと平安時代以来の高級リゾート地です。

平安時代には紅葉・虫の音・秋草の名所として知られてきましたが、建長年間(1249-1255)、後嵯峨上皇がこの地の離宮(亀山殿・現天竜寺)に吉野の桜を移植して以来、対岸の嵐山とともに紅葉と桜両方の名所となりました。

別荘地としての嵯峨野は平安時代初期から始まります。嵯峨野リゾートブームに火を付けたのは嵯峨天皇(786-842)です。唐風の書体を特徴とする三筆の一人であり、団茶を喫し、漢詩を得意とした天皇がこの地に離宮(嵯峨院・現大覚寺)を建てたのは、中国の隠遁思想に傾倒してのことと思われる。

隠遁思想とは世俗を捨て人里離れた山荘で詩画書や清談に耽ることを理想とする文人(教養人)の生き方です。

嵯峨天皇の時代以降も嵯峨野リゾートブームは続きます。

先に述べた後嵯峨上皇のほか、源融の栖霞観(現清涼寺)、有智内親王の嵯峨西荘、橘嘉智子の檀林寺、兼明親王の雄蔵殿、藤原定家の中院山荘、宇都宮頼綱の小倉山荘、その他、祇王・小督・角倉了以・向井去来など各時代に亘り列挙に暇がないほどです。

これらの貴族・文人たちの中には積極的にこの地に來たのではなく、政治的失脚により中央から退いた人も少なからずいます。

また、別荘を建てた平安貴族たちは本当に世を捨てて隠遁生活に徹したわけではありません。隠遁風の気分を味わったに過ぎないでしょう。

しかし、これら別荘は後に数寄屋の想を生む下地になったと思われます。

慶滋保胤(よししげのやすたね)が『池亭記』(982)に京六条にある保胤の邸内に小山小池を築き西に阿弥陀堂を建て、「心山中に住するが如し」と書き残したことは興味深いことです。『池亭記』は平安時代の別荘趣味と後の「市中の山居」という数寄屋趣味を結び付ける史料ではないでしょうか。

『小倉百人一首』を藤原定家自らが染筆した色紙(小倉山荘色紙和歌)、通称(小倉色紙)は皆様よくご存知のことと思います。これは宇都宮頼綱の求めに応じ、定家が小倉山にあった頼綱の別荘、小倉山荘の障子に貼ったものです。

この色紙は後に武野紹鷗によって茶掛に採り上げられ和歌・茶の湯融合の先駆となりました。以降〈小倉色紙〉は茶掛の高峰に位置し続けます。ちなみに、紹鷗は「天の原ふりさけ見れば…」の歌を好み、中国で詠んだ和歌であるが故に和漢の境と評したそうです。

愛宕山の白雲寺は夏の暑気を避けるため、秋まで新茶を詰めた茶壺を預かった寺として知られています。このように嵯峨の地は茶の湯に少なからぬ因縁があるようです。

茶の湯との縁といえば、嵯峨棗がありますね。嵯峨周辺で造られ当地の春秋の風物を写した蒔絵を施した薄茶器です。枝垂れ桜・柳・藤・筏流・市松文様などの蒔絵があり、江戸期に入り量産され中期には嵯峨棗の名称が付いたようです。仕事は粗いですが素朴な味があります。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~